日本遺産を活かした伝統芸能ライブ
「NOBODY KNOWS」プロジェクト

※実施報告書より、コロナ禍における事業プロセスの記録と、関係者ヒアリングによる考察を交えたプロジェクトの波及効果を抜粋

2022年3月31日

公益社団法人日本芸能実演家団体協議会

目 次

１．事業プロセス ・・・ 1
１）各地域の事業プロセス ・・・ 3
（１）新規開催地
（２）継続開催地
２）コロナの影響を含む事業遂行の課題 ・・・ 6

２．NOBODY KNOWSプロジェクトの波及効果 ・・・ 8
１）関係者ヒアリングにみる本事業による影響 ・・・ 9
A.日本遺産・地域芸能に係る課題意識
B.事業のコンセプト・内容への評価
（１）「日本遺産×地域芸能×伝統芸能」の意義
（２）映像制作の意義
―コロナ禍の副産物からこの分野の新たな可能性へ―
（３）コロナ禍におけるツアーの意義
C.事業をとおし明らかになった課題
（１）事業スケールへの不安
（２）新たな映像手法への戸惑い
（３）文化財の「活用」のハードルの高さ
（４）コロナ禍故の調整コストの増加
２）事業の今後の展開の方向性 ・・・ 16
（１）体制について：地元の人材の起用と育成
（２）ツーリズム分野の可能性について
①インバウンド回復に向けた「種まき」
②マイクロツーリズムへの展開
③オンラインとリアルのハイブリッドの時代へ
（３）学校教育との関わりについて
（４）映像制作・オンライン分野の可能性について

１．事業プロセス

日本遺産を活かした伝統芸能ライブ「NOBODY KNOWS」は、2019（令和元）年度より日本博（※）主催・共催事業の1つとしてスタート。日本遺産を舞台に、地域に伝承される芸能とプロの伝統芸能パフォーマンス、そしてトークを交えたライブイベントを通して、各地の日本遺産や地域文化の魅力を再発見するプロジェクト。伝統芸能と地域の文化資源の共通課題から、芸能の視点を地域の文化資源に向け、地域と協働することで、**「各地の日本遺産や文化の担い手(自治体・事業者・伝承者)」×「伝統芸能 実演家」×「潜在的 観光客層」**の三者の活性化と以下の実現を目指した。

－地域内での文化継承に向けた魅力の掘り起こし、認知度促進

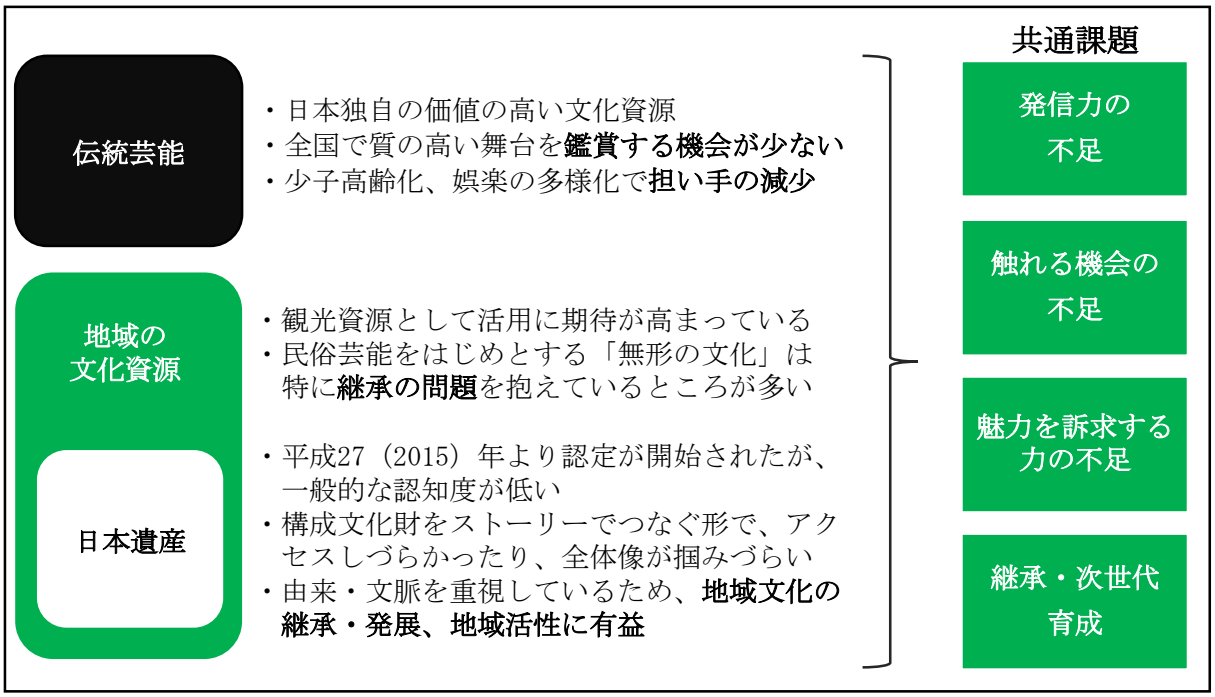
－日本遺産や地域文化の地域外への発信力の強化

－観光・インバウンド促進

2019年度に６地域で開催し、2020度は3地域において、新型コロナウイルスの感染拡大防止の観点から、主に映像を活用したプログラムを展開。2021年度は開催5地域のうち継続の2地域（神奈川県伊勢原市、鹿児島県薩摩川内市）では、ライブイベントやツアーを実施し、新たな3地域（岩手県平泉市、石川県小松市、徳島県徳島市・石井町）では、映像制作を軸に観光コンテンツの開発を行った。制作した映像はYouTube公式チャンネルにて無料公開中。
https://www.youtube.com/c/NOBODYKNOWS-tours

※日本博は、2020 年東京オリンピック・パラリンピック競技大会の機運醸成や訪日外国人観光客の拡大等を見据え、我が国の文化芸術の振興と、その多様かつ普遍的な魅力を発信するため、日本全国を舞台に展開される事業。

プロジェクトの出発点となる課題意識



１）各地域の事業プロセス

NOBODY KNNOWSプロジェクトでは、地域の日本遺産を活かした企画を行うため、地域有形・無形の文化資源の把握と現地の行政や芸能団体、事業者との協働が欠かせない。そのため、新規開催地では、まずは視察で事業成立の可能性を見極めた上で、具体的な企画検討に入った。それぞれの地域の事業概要・成果はフォトブック（※）に記載しているが、各事業のプロセスについてコロナ禍での対応や地域との協働の例を含め記述する。

※フォトブックは、下記よりダウンロード可能

https://nobodyknows.tours/wp-content/uploads/2022/03/nk_2021_photobook.pdf

（1）新規開催地

小松では、2019年にNOBODY KNOWSの前身となる「ニッポンたからものプロジェクト」を実施していたことから、日本遺産の構成文化財や行政の対応についても把握できていたため、小松市からサミット開催とあわせてのプロジェクト実施の打診があった際にも、スムーズに調整を進めることができた。当初は、イベント実施の想定だったが、4月にはコロナ禍の影響が広がっていたため、映像に切り替えて企画検討を進めた。構成・演出の花柳源九郎氏の発案により、石の文化を象徴する那谷寺での撮影をメインとして地域芸能の獅子舞の出演を市の担当者に調整を依頼したところ、コロナ禍のため那谷地区の獅子舞団体は出演不可との回答だった。獅子舞は各地域で奉納されているため、那谷地区で別な獅子舞団体が演舞することは難しく、別な地域での撮影可能性を検討し、北前船の日本遺産となっている安宅地区が候補となった。安宅宮獅子保存会から出演の承諾が得られたため、映像の構成を変更し、撮影場所も那谷寺と安宅の２か所となった。さらに撮影日の前日に出演者のコロナ陽性が判明したため、該当者の入らないシーンのみ撮影し、再度出演者・スタッフの日程調整を行って、後日改めて必要シーンの撮影を行った。なお、金沢市の映像事業者、監督を起用したことで、撮影に必要な現地でのロケハンや細かい調整は、東京から訪問することなく直接進行することができた。

また、映像のシーン展開に春夏秋冬をイメージしているが、撮影時期が限られるため、シルクオーガンザを使った春の演出案が浮上し、小松に工場を持つサンコロナ小田株式会社より素材提供を受け、地元企業とのタイアップも報道された。出来上がった映像は、 11月の日本遺産サミットでの公開後、小松市内のデジタルサイネージでの掲出やこまつ芸術劇場うららでの国民文化祭キックオフイベント「野村萬斎狂言公演」とあわせての上映など、小松市が積極的に地域内外の人々の視聴機会をつくっているほか、今回の映像DVDを日本遺産関連施設へ配布するなど、継続的に発信を行っている。

シルクオーガンザを用いた演出

平泉、徳島に関しても視察時期の調整もコロナの影響が少なからずあったため、有観客イベントが延期や中止となるリスクを避け、より多くの人に視聴してもらえるような映像制作をメインとした。平泉では、撮影場所となった中尊寺や地域芸能の団体との調整に現地の世界遺産平泉・一関DMOの役員でもある合同会社ひらいずむの菊池幸介氏の協力を得たことで、東京が緊急事態宣言中となり打ち合わせにうかがえない時期にも、菊池氏が相手先に足を運

新規開催地 事業プロセス

	小松	平泉	徳島
地域資源の把握	2019年 ニッポンたからものプロジェクト実施 ※2020年サミット開催とあわせての実施を小松市から打診。コロナ対策のため、公演ではなく映像上映の方向で調整 2021年 5月 現地視察 6月 現地視察・構成検討	2021年5月 現地視察・企画検討 6～7月企画・台本検討	2020年10月 現地視察 2021年 4月 現地視察・企画検討 6～8月 企画・台本検討 8月現地視察・企画調整
映像制作	7月 音楽録音 8月 現地映像撮影 9月 現地映像撮影 ※8月撮影予定が出演者コロナ陽性のため撮影日程を一部延期 10～11月 編集 11月13日 公開	8月 現地映像撮影 （トーク） 9月 現地映像撮影 （南部神楽実演） ※8月撮影予定が出演者の体調不良で延期調整 9月 編集 10月1日 公開	10月 現地映像撮影 ※9月撮影予定がコロナ拡大のため延期 2022年 1月 現地映像撮影 （箱まわし） 2月 編集 3月5日 公開
作品づくりの体制	構成・演出：花柳源九郎 映像プロデュース：上野崇（ドローイングアンドマニュアル株式会社） 監督：森崎和宏	台本検討：菊池幸介（合同会社ひらいずむ）、小岩秀太郎（縦糸横糸株式会社） 映像制作：山田雅也（縦糸横糸株式会社）	構成・演出：花柳源九郎 台本・演出：鈴木英一 監督：栂岡圭太郎（株式会社オリジナル）
成果物の展開	デジタルサイネージ／伝統芸能公演との連携上演／小松市内の日本遺産関連施設へのDVD配布	映像を活用したツアー開発／ワークショップコンテンツ開発	阿波十郎兵衛屋敷での催事とのタイアップ上映

び、一緒にオンライン会議システムで打ち合わせを行うなど、企画を進行することが可能となった。また、前ページの表には映像制作のプロセスのみ示しているが、12月に地元の３つの神楽団体によるワークショップを実施しており、観光コンテンツへの展開のための実践の場として、参加者からフィードバックを得たことから、今後への展開が期待される。

御幣束づくりワークショップ（岩手県一関市）

人形師天狗久を囲む徳島の芸能

徳島では、阿波十郎兵衛屋敷で地域の複数の人形座（アマチュア団体）が日々交代で阿波人形浄瑠璃を上演されており、地元の芸能団体に詳しい佐藤憲治館長に企画相談や地元出演者の調整を依頼した。今回、面劇の復活上演のため「奥州安達原」の演奏が必要となったが、徳島ではもっぱら「傾城阿波の鳴門」が上演されており、その他の演目への対応が難しいようだったが、なんとか出演者が確保できた。また、現地の映像事業者を起用したことで、屋外シーンの候補地探しやインサートに使用する吉野川や藍についての映像をベストな時期で撮影することが可能となった。本映像を通して、人形師天狗久を介して徳島内の芸能のつながりが再認識されたことで、関係者の間では新たな企画展開の構想が持ち上がっている。３月の#徳島ニューノーマル映画祭での上映を皮切りに、ゴールデンウィークには阿波十郎兵衛屋敷で複数回の上映が予定されている。

（２）継続開催地

一方、継続開催地では、前年度までの事業により地域資源の把握ができており、行政担当者や地域事業者との連携がとれているため、公演やツアーの形態・実施時期について、現地関係者と協議の上、企画検討・準備を行った。

伊勢原は小田急電鉄株式会社が地域ブランディングに取り組んでおり、小田急トラベルが例年複数の企画を催行している。本事業を協働で実施することで、通常のツアーではなかなか組み込めないコンテンツを入れたノウハウを共有することが可能となり、参加者からのフィードバックを得ることで、今後の地域事業者の自主企画での展開が期待される。今年度は、ロマンスカーの号車貸切、落語家による案内・実演、能楽殿での体験企画を新たに試みた。また、外国人向けツアーの催行にあたっては、JTB神奈川西支店の協力が決まったのが秋口となり、繁忙期と重なったこともあって広報展開に十分な時間をかけることができなかったが、昨年度撮影した大山詣りの映像を用いた動画広告配信を試みた。同映像に地域芸能の伝承者（神楽・倭舞）のコメントを加え、登山とは異なる大山詣りのイメージを伝える

関連映像を制作した。2020年度に制作した長編の映像とあわせて、映像をきっかけに伊勢原を訪れたり、地域の歴史文化への理解を深めるツールとして継続して無料して配信を行う。

公開映像：日本遺産「大山詣り」と芸能の伝承

薩摩川内は、前年度の事業で来訪した薩摩琵琶奏者の友吉鶴心氏より、かつて薩摩琵琶の名器が多くつくられた入来地区で、地元の子供たちに薩摩琵琶にふれる機会をつくりたいという希望が寄せられ、事業内で子供たちのお稽古と本番でのプロとの共演を試みた。次年度以降も地域でこうしたお稽古が継続できるよう、市の担当者による入来麓伝建地区協議会や入来文化協会の方々への声掛けで、稽古の準備・サポートや見学に来ていただき、当日の会場運営サポートにも協力いただいた。薩摩琵琶のお稽古は、市の担当者が入来の小中学校の先生に相談をして、継続してお稽古が可能な４名の子供たちが参加。当初６月に稽古を開始する予定だったが、緊急事態宣言発出地域からの訪問者に市の職員が接触できないルールとなっていたため、延期して７月下旬からのスタートとなった。対面での稽古では常にコロナの状況をみながらの調整があり、オンラインでも地域内の感染率があがるとコミュニティセンターが使用できず中止することがあった。本番の実施にあたっては、公演日は早めに確定していたが、会場の旧増田家住宅が無料公開施設となっていたため、有料の公演準備や本番が公開時間にかかることをめぐって市との調整に時間を要した。市との折り合いがついたのは９月となり、会場構成・演出等の準備や広報にかけられる時間的余裕が逼迫した。また、公演鑑賞とあわせたまち歩きのツアーの調整・売り出しも、現地DMOである薩摩川内市観光物産協会が繁忙期に入ったためなかなか進まず、ぎりぎりでの告知・集客となった。

公演では、入来神舞の演目で現在は舞われていない「弓舞」を花柳源九郎氏が新演出し、入来神舞の鬼神とともに出演するコラボが実現。衣裳で必要な甲冑は、薩摩川内市内にある甲冑工房丸武（大河ドラマでも発注を受けている日本屈指の工房）の協賛を得ることができた。甲冑の着付けは地元の方にサポートいただき、薩摩琵琶の子供達の着付けは地域の着付

旧増田家住宅での薩摩琵琶の稽古

新演出で上演した「弓舞」

サークルの方々の協力を得た。唯一の不測の事態としては、前日まで晴れ予報だったため、旧増田家住宅（国重文）でリハーサルと会場準備を行っていたが、当日の朝に雨天となったため、急遽会場を小学校体育館に変更したことで時間的な制約がある中、設営・準備に追われた。雨天時対応は屋外公演につきものではあるが、前日の判断は難しく、スタッフや市職員や入来麓伝建地区協議会など地域のボランティアの方々の協力により、無事公演を終える事ができた。関連映像として、薩摩琵琶のお稽古と本番、子供達のコメントを入れたドキュメンタリーを制作。2020年度制作の映像とあわせ、地域の歴史文化を広く伝え、現地で継続される予定の薩摩琵琶の稽古や子供達の発表の機会などを地域イベントとして育てていくことが期待される。なお、2020年度に制作した映像は、大宮神社の境内の看板にQRコードが表示されたことで継続して視聴されており、テレビ局のロケハン時にも目に留まってたびたび映像使用の相談がある。本事業でクオリティの高い映像撮影ができたことが、地域文化を広める素材としても活用されている好例である。

２）コロナの影響を含む事業遂行の課題

いずれの地域も東京から訪問する際には、コロナの状況を注視しながら現地と協議する必要があった。現地関係者とオンライン会議システムを活用しながらうまく連携できたことで、打ち合わせ等は進めることができたが、いざ現地訪問というときにコロナのためスケジュールを延期するケースが相次いだ。コロナ禍によるトラブルは未然に回避することができたが、そうした変更が重なったため、調整コストが大きく膨らんだ。また、人員が限られているため、延期したことで事前に予定していた他地域の業務が重なり逼迫した。

また、公共ホールなど集客対応を常時している施設であれば、コロナ時の観客対応のノウハウがある程度できているが、本事業では普段公演に使われていない文化財等が会場となっているため、一から対応策を考える必要がある。定められた枠がないことで、かえって調整に時間がかかり、事業スケジュールへの影響があった一方で、本事業を通して今後の文化財活用のための前例ができた側面もあった。ただ、日時の確定が遅れるとチケットやツアーの販売への影響が大きいため、本事業でのパイロット的な実施からのステップアップが期待される。

継続開催地 事業プロセス

<table>
<tr><th></th><th>伊勢原</th><th>薩摩川内</th></tr>
<tr><td>企画検討</td><td>2021年
5～7月企画検討
8月出演者調整・実施日程の確定
9月外国人向けツアーをJTB神奈川西支店と調整</td><td rowspan="2">2021年
4月地元小中学生による薩摩琵琶お稽古・本番の企画検討
5月小中学校と参加者調整、本番日の確定・出演者調整
7～10月薩摩琵琶のお稽古をリアル、オンラインで実施
※6月開始予定だったが、コロナのため延期調整</td></tr>
<tr><td>広報・本番</td><td>10～11月告知準備
リリース、動画広告配信
12月18日本人向けツアー
12月19日外国人向けツアー
※GO TOトラベルの再開ニュースが出た時期と重なり、またのちにコロナ拡大で入国制限があったため、告知効果は薄く、参加者数は限られた。</td></tr>
<tr><td></td><td></td><td>9月実施時間・会場キャパシティの確定、ツアー準備
10月告知
11月6 日本番</td></tr>
<tr><td>関連映像</td><td>大山参りのイメージを伝える映像（地域で伝承する子供たち、指導者のインタビューを含む）</td><td>約３か月のお稽古と本番の様子を追ったドキュメンタリー映像</td></tr>
<tr><td>コンテンツ検討体制</td><td>大山阿夫利神社、伊勢原市、一般社団法人伊勢原市観光協会、小田急電鉄株式会社、経糸横糸合同会社
映像制作：山田雅也（縦糸横糸合同会社）</td><td>構成・演出：花柳源九郎
舞台監督：深尾礼武（株式会社シイツウ）
映像制作：株式会社HEIYA</td></tr>
<tr><td>今後の展開</td><td>実施ノウハウ・参加者フィードバックから現地での企画展開</td><td>実施ノウハウ・参加者フィードバックから現地での企画展開／実行委員会による薩摩琵琶稽古の継続／入来神舞映像のテレビ番組等での使用</td></tr>
</table>

2. NOBDY KNOWSプロジェクトの波及効果

文化観光資源の力をより効果的に活用し、文化の継承、地域活性化、発信力の強化、観光・インバウンド促進を相乗的に図ることを目的とした「NOBODY KNOWS」事業では、2021年度の取組の成果や課題を把握するために外部評価委員会を設置し、事業の充実に向けた議論の場とした。また、ワーキング委員による各開催地の立場の異なる関係者へのヒアリングを行い、社会的・文化的効果の検証や今後の展開にあたっての意見収集に努めた。

外部評価委員会および各地域の実施体制とヒアリング対象者は以下の通り。

外部評価委員会

氏名	所属	備考
大澤寅雄	ニッセイ基礎研究所	ワーキング
岡本真佐子	青山学院大学　地域社会共生学部　教授	
福田裕実	東京音楽大学　准教授	ワーキング
（オブザーバー）		
小岩秀太郎	縦糸横糸合同会社	企画協力
三好剛平	三声舎	広報協力
仁藤安久	株式会社Que	コミュニケーションデザイン

ヒアリング

日程・地域	対象者
2/10（木）	徳島県　政策創造部　地方創生局　加藤貴弘
[徳島]	石井町　社会教育課　山下英郎
	阿波十郎兵衛屋敷　佐藤憲治
	株式会社オリジナル　栂岡圭太郎
2/13（日）	平泉町　観光商工課　鈴木真由子
[平泉]	牧澤神楽　吉田聖樹、阿部大樹
	合同会社ひらいずむ　菊池幸介
	経糸横糸株式会社　小岩秀太郎
2/17（木）	小松市　文化振興課　岩本信一
[小松]	安宅宮獅子保存会　多島昭洋
	ドローイングアンドマニュアル株式会社　上野崇
[伊勢原]	伊勢原市　商工観光課　小巻泰之
	大山阿夫利神社　目黒久仁彦
	小田急電鉄株式会社　観光事業開発部　関根怜一
	株式会社JTB　神奈川西支店　井上裕希
[薩摩川内]	薩摩川内市　教育委員会　文化課　鮫島弘宣
	入来神舞保存会　是枝政文、山下昌仁
	入来中学校　福元勇吹
	株式会社シイツウ　深尾礼武、糸山亜也香

※継続地域の伊勢原と薩摩川内は合同で実施

１）関係者ヒアリングにみる本事業による影響

ワーキング委員2名を中心に、芸団協立ち会いのもと2月10日、13日、17日に、５地域の行政、地域芸能伝承者、制作者事業者へのヒアリングを行った（オンライン実施）。本事業を通してどのような気付きがあったのか、最初にA.日本遺産・地域芸能に係る課題意識をまとめたうえで、B.事業のコンセプト・内容への評価、C.事業をとおし明らかになった課題、そして事業の今後の展開の方向性を以下に述べて行く。

A. 日本遺産・地域芸能に係る課題意識

ヒアリングでは、複数の行政が日本遺産をめぐり共通で抱えている課題として、a-1)地元や周辺住民にとって日本遺産の認知度が高いとはいえない状況であること、a-2)どこの自治体でもそのPRに苦慮していることなどが挙げられた。さらにa-3)新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、日本遺産を取り上げたイベントや伝統的な祭り、芸能の奉納を中止、あるいは規模縮小せざるを得なかったこと、またa-4)「コロナ禍なので観光をPRしづらい」という問題もあわせて浮上した。

地域芸能については、特に伝承者の間で深刻なのが後継者の確保であった。b-1)今後の伝承を担う若い層や子どもたちへの入り口を拡げること、b-2)一度きりの体験で終わるのではなく継続的であること、b-3)伝承が途絶える前に一緒に練習等をする中でしっかりと習得してもらいたいことは、どこの団体でも共通の要望であった。また、b-4)コロナ禍においては練習の機会が制限され、子どもたちの練習の成果の発表の機会が失われていることが指摘され、b-5)さらにはこれが芸能の奉納等を通じた子どもたちの「地域を守る」という自負、地域に対する愛着を損なうことにつながることを危惧する声も聞かれた。

B. 事業のコンセプト・内容への評価

（1）「日本遺産×地域芸能×伝統芸能」の意義

こうした課題に対し、本事業では第一に、**日本遺産×地域芸能×伝統芸能をあわせた点**が特徴である。すなわち、日本遺産の構成文化財の映像を切り取って組み合わせて紹介する手法はよく用いられるが、日本遺産が持つストーリー性に伝統芸能をあわせることで、以下の新たな効果が生まれたことが指摘できる。

例えば石川県小松市には二つのストーリーがあるが、石と海運の文化をテーマとした特別映像「うつりゆく季（とき）～花鳥風月～」（以後、《石川県小松市》と記す）において、**地域芸能を含む現地の豊かな文化資源の数々を融合する、つなぐ役割**を果たしているのが、日本舞踊の花柳源九郎氏の構成・振付による日本舞踊や邦楽囃子、胡弓、笛（篠笛・能管）等の伝統芸能・伝統音楽であり、こうした手法は新たな発見であるという声は行政からも聞かれた。

また当該地域にはない伝統芸能の視点からの演出・構成が入ることにより、地域の貴重な

文化資源が表舞台に出る例もあった。例えば徳島県石井町の特別映像「人形師天狗久～阿波木偶箱まわし、面劇、阿波人形浄瑠璃～」（以後、《徳島県石井町》と記す）は、歌舞伎研究者であり常磐津節太夫、歌舞伎舞台の脚本補綴を手掛ける鈴木英一氏の台本、前掲の花柳源九郎氏の構成・演出によるものである。人形師・天狗久に焦点をあてた構成にすることで、もともと接点がなかった阿波人形浄瑠璃と阿波木偶箱まわしをつなげ、さらには石井町に資料のみ残されていた「面劇」の復活上演を果たした。以上より、こうした外からの伝統芸能の専門的な視点には、地域の文化資源をつなぐ役割のみならず、**地元の人にも知られていない文化資源の掘り起こし**という役割もあることが明らかになった。これは、「徳島だけでやっていたら、こうはいかなかった」という行政の声に象徴されているだろう。

岩手県平泉町の“源義経”をテーマにしたクロストーク「芸能とたどる源義経―南部神楽・能楽・日本舞踊」（以後《岩手県平泉町》と記す）では、地域芸能×伝統芸能の扱い方について、現地コーディネーターへのヒアリングから、**それぞれの芸能を比較するのではなく並列的に扱う**ことを目指したことが明らかになった。この制作側の狙いどおり、源義経という共通の題材を軸に義経に縁のある平泉の土地で開催されたトークの映像を見ると、それぞれに拡がりを見せながらもクロスしている様が印象的であった。ともすれば、伝統芸能はプロ、地域芸能はアマチュアという線引きのもとで、伝統芸能がリードする、伝統芸能が中心となることが多いが、ヒアリングでの花柳源九郎氏の言葉「伝統芸能の実演家は漂流していて、漂流している人たちが集まる。地域芸能は、完全に土地に根付いている。時代によって変化する側面もあるが、地域芸能はそのまま純粋に受け継がれている。我々は一欠片の純粋なものを入れながら表現するが、地域芸能では表現していることが我々よりも純粋であって作意がなく、そこにはかなわない。実演家の人が体験することが実演家のクオリティの底上げになる。」にあらわれているとおり、**伝統芸能の側からの地域芸能へのリスペクト**もまた、地域芸能×伝統芸能の展開においては重要になってくるであろう。

一方で、地域芸能を伝承する立場からは、伝統芸能との共演が刺激となっていることが明らかになった。特に地域芸能の若い会員たちにとって、同じく若手で活躍している伝統芸能の実演家との共演は大きな刺激となっていたようであり、伝承へのモチベーションへの向上が見られた。さらに本事業の特徴として指摘できるのは、本事業では**地域芸能と伝統芸能が多様なかかわり方**をしている点である。例えば、鹿児島県薩摩川内市の「薩摩の武士が生きた町・入来麓で薩摩琵琶と地域芸能を継承する公演とバスツアー」（以後、《鹿児島県薩摩川内市》と記す）では、日本舞踊とのコラボレーションによる新演出で、地元の入来神舞の演目で現在では実演されることのなくなっていた『弓舞』の実演を果たした。《石川県小松市》では、安宅宮獅子に伝わる獅子退治の棒振り役を務める歌舞伎役者の尾上右近に保存会メンバーが指導し共演をした。このように多様な関わりの中で共通して、前述のクロストーク同様に、**地域芸能と伝統芸能が対等な立場で関わっていること**も、この事業の特徴であると言えるだろう。

また、その舞台として文化施設などではなく、馴染みのある地元の「日本遺産」を舞台に伝統芸能の実演家たちと関わるという点でも、大きな意味があることが明らかになった。例えば、神奈川県伊勢原市「古くからの信仰の地、大山で祭礼とともに育まれた文化・芸能を体験する実演つき大山詣りツアー」（以後、《神奈川県伊勢原市》と記す）の大山阿夫利神社の権禰宜は、「神社と本物の伝統芸能との連携というのがこれほどいろんな広がりをもち、今後に期待ができるものになるとは最初はつゆとも思っていなかった。」と語り、《岩手県平泉町》では牧澤神楽のメンバーが「中尊寺のご本尊の前でトークし、神楽を演じることは光栄である」と並々ならぬ思いを語っていた。

そして、これは伝統芸能の側からも同じであり、「これまで歌舞伎や日本舞踊の中での義経像はあったが、ここにきて義経に縁のある場所の空気を肌で感じ、これをこれから演じるときに活かしたい」と語っていたことから、伝統芸能が日本遺産をつなぐ役割をしているのと同様、日本遺産を舞台としそこで育まれた歴史・文化に同じ思いを馳せることで、**日本遺産もまた地域芸能と伝統芸能をつなぐ役割をしている**ことが指摘できよう。

さらに、こうした「つなぐ」役割の先には、日本遺産、地域芸能、伝統芸能のそれぞれの入り口から、例えば日本遺産を知らなくても伝統芸能に精通した人が「日本遺産すごいね」と日本遺産に関心を持ち、逆に伝統芸能を知らなくても日本遺産から入って伝統芸能に関心を持つなど、相互への広がりや可能性がこの映像からは見いだせた。

（2）映像制作の意義―コロナ禍の副産物からこの分野の新たな可能性へ―

一般的にそうであったように、本事業において昨年度は映像制作やオンラインという手法の有効性を指摘しながら、これらは思いがけなく起こったコロナ禍の「副産物」の域を出ていない中での認識であったように思われる。それがこの2年の間に、以下の点から、日本遺産、地域芸能、伝統芸能のそれぞれの分野において、新たな可能性を秘めた手法としての地位を不動のものにしたことが確信できた。

第一に**映像の在り方が「記録」から「作品」へと大きく変化している点**である。従来の日本遺産や文化財の記録映像やPR映像は、そのままを忠実に記録したり解説が入る構成が多く、知らない人にとっては「わかりやすい」というメリットもあるが、別の見方をすると映像作品としては印象に残らないものが多い。今回のヒアリングでも特に行政の立場からそのような声が多く聞かれた。地域芸能の記録映像の在り方についてはこれまでも文化財研究所などで検討されてきたが、その目的故に「記録」のための在り方の域を出ることはなかった。それがこのコロナ禍で、**ストーリー性やメッセージ性の強い「作品」**が生まれ始め、本事業において今年度制作された《徳島県石井町》と《石川県小松市》の二つはまさに「作品」であった。《徳島県石井町》は、前述のとおり台本・演出が鈴木英一、構成・演出が花柳源九郎、映画監督が栂岡圭太郎（株式会社オリジナル）により制作されている。一方の《石川県小松市》は、構成・振付が花柳源九郎、映像監督が森崎和弘、映像プロデュースが上野崇

（ドローイングアンドマニュアル株式会社）であり、両者に共通するのは、構成・演出が伝統芸能の専門家である点と、監督と制作会社がその土地を拠点に映像制作を手掛けている点である。そして、下記のとおり、その手法はそれぞれに異なるものの映像作品の中で、日本遺産や地域芸能の「点」のつながりが見られたことこそが、本事業における映像の可能性をもっともよく表していると言えるだろう。

例えば、《徳島県石井町》は『宇野千代見聞集』より作家の宇野千代が天狗久を訪れたときのエピソードをベースに台詞・語りを構成し、日本遺産の構成文化財である藍床を敷地内に持つ“藍屋敷”こと武知家住宅で、良質な薬への祈りを込めた阿波木偶「三番叟まわし」を収録し、また石井町出身の花之家花奴がはじめた1代限りの「面劇」を、町の文化財に指定されている面を使って復活上演している点が特徴である。舞踏家で俳優の麿赤兒氏が迫力のある天狗久を演じ、徳島県内でも知らない人が多い天狗久を中心に惹きこまれるストーリー展開で、見事に日本遺産や地域芸能の複数の点がつながっていた。ヒアリングからは、行政としても、これまで脚本があって撮影することは珍しいと言い、そうした非日常の映像の世界に町の中の見慣れた武知家住宅や人物が出てくるがゆえに、地元の人にとってはそれらを再評価するきっかけとなっていることも明らかになった。

次に《石川県小松市》は小松市で日本遺産に認定されている２つのストーリーから現地の石と海運の文化に着想を得て、日本遺産の構成文化財である那谷寺や安宅住吉神社、また歌舞伎の『勧進帳』に縁がある安宅海岸を舞台に、日本舞踊、胡弓、笛（篠笛・能管）、邦楽囃子を背景に、地元に伝わる安宅宮獅子と歌舞伎役者の尾上右近の共演や、小松ならではの石材や九谷焼などの文化資源をうつりゆく四季に織り込んだ映像となっている。その特徴はなんといっても映像の美しさであり、行政や映像制作会社を通じて視聴した人の多くの第一声が「美しい」との感想を寄せていた。このような作品ができあがった背景には、映像制作会社として以下の2点を目的としていたことが挙がられる。すなわち、「伝統芸能の業界を支えている人たちの真剣なまなざしや使命感などに敬意をはらい、伝統芸能の既存顧客も納得できるクオリティを必要最低限保つこと」「YouTubeで無料でしばらくの間公開されるため、新しい新規の顧客の確実な獲得も目指すこと」である。したがって、「映像をとおして交流人口が増えることを目指し、純粋に“きれい”“美しい”といった言語を超えた表現の中にある魅力を、できるだけかっこよく素晴らしく切り取って、映していきたかった。そのために、飽きの生まれない編集のテンポ感やカメラアングルを工夫して作った。」という意図が込められており、その思いが充分に発揮された作品になっていたと言えるだろう。また、本事業では、映像に使う「石」の選択に際しても博物館の学芸員が魅力を引き出せるようなものを選んでいたと言い、本事業をめぐり行政の複数の部署の協力体制が確認できた。

第二に、前述の**映像作品における日本遺産・地域芸能の「点」のつながりが、映像作品のみならず、実際の観光ルートや各施設・関係者との連携へとつながる可能性を秘めている点**である。すなわち、従来の日本遺産のＰＲ映像や文化財の記録映像は、それぞれの映像を切り取

って紹介するということが通例である。これらの映像は、見る人にとっては「学び」「理解」するという要素が強い。一方で本事業において作られた映像作品は、非日常性を内包しながら見る人の印象や感情に訴えかけるものであり、こちらのほうが強く印象に残ると思われる。そして、このようにして映像の中で印象深くつながった「点」と「点」は、例えば《徳島県石井町》の映像の舞台になった阿波十郎兵衛屋敷の関係者が、「十郎兵衛屋敷、天狗久資料館、箱まわしなどが連携プレイで観光を考えていくことで、総合力を出していける」と話していたことなどから、映像に留まらず、各構成文化財をつなぐ観光ルートへの展開や、複数の施設間でこれまで個別におこなってきたイベントや観光客の確保に向けた取り組みなどの連携へとつながる可能性があることが明らかになった。

第三に、本事業では、**地元の映像制作会社と映画監督の起用によって、地域の魅力が映像に存分にあらわれている点**である。例えば、《石川県小松市》では、行政の立場からも「ずっと小松に住んで同じ景色は見ているが、映像の美しさを見てはじめて美しいと感じた」など、新たな魅力の再発見に驚く声が聞かれた。《徳島県石井町》では、阿波の人形をよく知る映画監督が「人形の寄りや手の仕草を見せたかった」と話していたように、また、《石川県小松市》では、安宅宮獅子の伝承者が「獅子舞のポイントポイントはしっかりと押さえていただいた。映像だけを見ても宮獅子の何をやってるかということが、住民も理解できた。」と話していたように、記録が主たる目的とした映像ではなくとも、地域芸能の魅力を最大限に引き出せていることが明らかになった。また、構成・演出の花柳源九郎氏も「本事業では、現地の監督さんとやれた意義が大きい。美しい映像にしたいという地元への愛があって、こだわって関わってくださったのが大きかった。」「舞台公演でスタッフも全て東京から連れていくと、現地の方と深く関わることはあまりないが、本事業では東京のスタッフを送り込むのではなく現地の方々と交流ができた。日本は、その土地それぞれで全く価値観が違うので、交流が大事である」と話しており、外側からの目線だけではなく地元の目線、そして両者の交流が重要であることも浮かび上がった。

（3）コロナ禍におけるツアーの意義

本事業では観光につなげることが重要な目的の一つである。2019年度は実施できたツアープランが2020年度はコロナ禍の影響を受けて全面的にオンラインプログラムに切り替えられた。3年目の今年度は、２年継続の《神奈川県伊勢原市》（2020年度バーチャルツアー）と《鹿児島県薩摩川内市》（2020年度映像コンテンツ制作とライブ配信）において、地域のコンテンツを活かした公演とあわせてツアーを実施した。また、《岩手県平泉町》では、地域芸能を活かした観光コンテンツ開発の一環として、「平泉・一関地域の『神楽』体験ワークショップ」を開催した。

例えば《神奈川県伊勢原市》の大山阿夫利神社の権禰宜の「この2年間コロナ禍の影響で全く人と触れ合わずにzoomをとおしてのツアーが基本となってきていたので、本物に触れ合う

熱量を久しぶりに思い出すツアーとなった。」、行政からの「参加者のみならず運営側にとってもこのツアーへの熱意を感じ、コロナ前よりもツアーや観光、イベントというものが熱望されている」という発言からも明らかなように、以上のツアーの実施から、参加者のみならず、地域芸能の伝承者、行政側からも**昨年度のオンラインプログラムを経たからこそのリアルへの欲求の高まり**が指摘できる。

《神奈川県伊勢原市》では、2年目に突入したコロナ禍の抑制された生活の中で、久しぶりに外へ出て参加した親子もいたという。親子そろって前のめりになって生の伝統芸能に触れており、その熱量がほかのツアー参加者や、地域芸能の演じ手、何より子どもたちの演じ手にも直に伝わり、演じ手たちのモチベーションが高まったという。こうした**場の共有による相乗効果はリアルならではの効果**であろう。また、旅行会社の立場から、従来型のツアーのように観光をフックにするのではなく、歴史や文化、地域芸能に目を向け、特に大山という非日常の空間の中でそれらを体験できるツアーの効果が大きいことが指摘され、観光事業者の中でも日本遺産や地域芸能は、周知もしくは発信できる素材であることを改めて認識したとの声があった。

次に、《鹿児島県薩摩川内市》では、**前年度の映像配信による周知から、今年度の公演・ツアーへという「流れ」ができたことによる効果**も指摘された。前年の2020年度に制作した映像は記録映像ではなく、行政曰くはじめての「見せるための映像」であり、「入来神舞の伝承を継続させていくためには地域内外の人たちにまず知ってもらうことが大事であるとの認識から、現地の空気感も一緒に知ってもらうきっかけとなった」として、高く評価されていた。そして今年度は、「入来神舞を奉納する大宮神社に設置した入来神舞の文化財説明板に映像のQRコードを追加したところ、そこから初めて映像を見たという声が寄せられ、入来神舞に関する問い合わせも増えた」という。今年度の奉納には、コロナ禍にも拘わらず入来神舞を見るために境内いっぱいの参拝客が来訪し、また今年度のツアー参加者の多くから、「初めて入来神舞を見て素晴らしい」「こういう舞は初めて見た」と生で見ることによる迫力への反響があった。地元の人たちの前年度の「映像だけでもこれだけのことができる」という驚きの声にあらわれているように、**従来型の記録映像ではなく「見せるための映像」が、神社の奉納見学やツアーへの参加を誘導する効果を持つ**ことを証明した例であると言えるだろう。そして、《鹿児島県薩摩川内市》では、日本遺産に認定されて最初の年は観光客が3倍くらいにまで膨れ上がったが、その後コロナの影響で観光客が減少するとともに地元も観光客向けの活動が困難となったという。それがこの2年間で地元に活気が再び呼び起こされたことが、行政の立場からしても嬉しいと言い、**地域住民と行政との間で「次は何ができるか」という対話が生まれた**ことも、本事業が果たした役割として大きいと言える。

そして、複数の地域芸能伝承者が参加した《岩手県平泉町》のワークショップでは、参加団体である蓬田神楽が牧澤神楽の舞を見て「うちの団体ではここが違う」といった話を熱心にしている姿が見られたという。当該地域においては20年くらい前までは各地域に存在する

南部神楽団体同士の横のつながりがあったが、ここ最近は下火になっていた。しかし、今回のワークショップをとおして、「団体ごとに違いがあることこそが地域芸能の価値である」ことを再認識でき、こうした複数の団体が集いそれぞれに参加者へ教えるという体験型ワークショップの場面では、**参加者のみならず、そこに集った地域芸能同士が、互いに芸としての裾野の拡がりやバリエーション、様々な魅力を実感できる機会となっている**ことが指摘できる。

C. 事業をとおし明らかになった課題

（1）事業のスケールへの不安

今回、一部の地域芸能の伝承者の間からは、事業に関わったことは「結果としてすごくよかった」という感想であるが、「第一印象として、**事業のスケールが大きくて全体像が見えなかった**。今まで新聞やメディアの撮影はあったが、このような映像として撮られることははじめてで、それに対して恐る恐る臨んだ。」という声も聞かれた。これは昨年度も指摘したことであるが、特に地方の人たちにとっての「東京の団体」「伝統芸能」「国の補助金」というインパクトは大きい。また、本事業に限らず、保存会のトップが事業の説明を聞いて理解していても、ほかの保存会会員や地域住民が理解をしていないといった問題は起こり得る。この2年間はコロナ禍によりコミュニケーションも限られる中で困難な側面もあっただろうが、**これまでの当該地域の地域芸能の活動を把握し念頭に置いたわかりやすい説明は、事業を進めるうえで重要**である。

（2）新たな映像手法への戸惑い

（1）とも関係するが、記録映像やメディアの取材の場合は現地での奉納の様子などをそのまま撮影することが多く、撮影に際して脚本や、徹底した構成・演出が入ったり、伝統芸能との共演などない映像がほとんどである。例えば、《石川県小松市》は、前述のとおり映像制作側の狙いのもとで印象に残る美しい映像となったが、一方で一部の伝承者や周囲の住民の間からは、「映像は綺麗だが抽象的な映像で何が言いたいのかわからない」等の声も聞かれた。これは、自らの経験値から、すなわちこれまでの記録映像やメディアによる報道等の「わかりやすさ」を求めて映像を見ることによる、思い描いていた映像と異なることへの戸惑いの声でもあると思われる。これに対して、行政側からは「第一にはこうした映像をまず見てもらって日本遺産を知るきっかけにしてもらいたい。そこから興味のある人は必要な情報を取り入れるために自ら動くと思う」との指摘があった。また、《神奈川県伊勢原市》では、同じく行政の立場から、「ツアー参加者からさらに深く知りたいという姿勢も見受けられたので、行政としては地域の歴史文化を幅広くどう周知していくか、深掘りするその魅力をどう伝えていくのか検討する必要がある」との指摘もあった。以上より、映像とツアー共通の課題として、それらをきっかけにさらに深堀した情報に行きつくための仕組みづくりが今後は必要であろう。

（3）文化財の「活用」のハードルの高さ

日本遺産の構成文化財を舞台に展開される本事業では、日本遺産の構成文化財以外にも、無形文化財としての伝統芸能、無形民俗文化財としての祭りや地域芸能、そしてそれらに使われる有形の文化財含めて、数多くの文化財が登場する。したがって行政側としても、文化財保護担当部署や博物館や資料館等の学芸員の協力が欠かせない。今年度の事業でも、例えば《徳島県石井町》では、箱まわしを行った“藍屋敷”こと武知家住宅は国指定重要文化財であり、映像の中の面劇の復活で使用している天狗久製作の面は町指定有形文化財である。町の文化財保護行政の立場からは、特に有形の場合には指定した文化財の現状維持が文化財保護行政の基本的なあり方であるがゆえに、万が一壊れた場合の修繕の難しさなどの面からも、指定文化財の活用のハードルが高いことが課題として挙げられた。また、武知家住宅については、平成30年に国の重要文化財に指定されたばかりであり、活用規程もまだなく公開も基本的にしていなかった。同じ町内の国指定重要文化財である別の藍屋敷の田中家住宅も、公開はしているが当主が高齢で観光客の対応が困難であるという課題を抱えているという。国の文化財保護をめぐる昨今の動きとして、文化財保護法改正に伴い、「保存」と「活用」のうちの「活用」にシフトしつつある。したがって、各地域の文化財を「活用」してきた本事業において浮上したこれらの「文化財の活用にかかる課題」は、国の文化財保護政策にとっても検討すべき重要な課題であると言えるだろう。

（4）コロナ禍故の調整コストの増加

コロナの影響は映像の業界で大きく、例えば出演者はじめ監督、カメラマンはその人でなければならない職務であり、替えがきかない場合が多い。ヒアリングからは、撮影に入る前にPCR検査を受け、安心安全な撮影現場を作ることに注力はするが、普段以上に気を回さなければならないことが非常に増えており、現場は疲弊してしまっている状況、そして自ずと密になる撮影現場においてリスクヘッジをどう取るか、調整コストが今までよりも負担になってきている状況が課題として挙げられた。昨年度はこうした具体的な課題が語られることはなく、コロナ2年目だからこそ見えてきた課題と言えるだろう。

２）事業の今後の展開の方向性

ここでは、以上の３．で示した以外の課題と、そこから浮上した今後の展開の方向性について述べて行く。

（1）体制について：地元の人材の起用と育成

B.（２）において、地元の映像制作会社による映像制作の効果について指摘したが、本事業のプロセスじたいが、地元にこういうことができるプレーヤーがいるということを再発見する契機になり、スタート地点に立たせるきっかけになったという点で、ある一定の役割を果たせたと言えるだろう。あわせて重要となるのが、**地域の内側と外側とをつなぐ地元の**

コーディネーターの存在である。例えば、《徳島県石井町》では阿波十郎兵衛屋敷の佐藤憲治氏が、《岩手県平泉町》では合同会社ひらいずむの菊池幸介氏がこの役割を担っていた。ここから、コーディネーターとは、３．（１）で指摘した地域芸能の伝承者が抱える事業への不安に対しきめ細やかに対応し、その他の地域住民が何を求めているのか地域の文化的土壌や組織体制含めて把握し、外側へ伝える、あるいは内側へ伝える「通訳者」のような視点を持った人材であることが指摘できる。この役割を行政が担う、または一施設や地域芸能に関わる人が担うことも可能であろう。《神奈川県伊勢原市》では、現地のガイドの育成の必要性も指摘されていたが、その地域のことを把握し外側からの視点に対応し得る人材は現地のガイドとしても適任であるし、また本事業のような事業を展開するにあたっては、地域発信でありながら地域外の協力者へアプローチできる企画者にもなり得るものと思われる。**こうした人材の育成が、今後は重要**になってくるだろう。

（２）ツーリズム分野の可能性について

ツーリズムの視点からは、コロナ禍故の複数の課題が浮上したため、以下の3点にしぼって述べて行く。

①インバウンド回復に向けた「種まき」

共通して聞かれたのが、**コロナ禍でインバウンドが実質消失しているという課題**である。この課題に対しては、《鹿児島県薩摩川内市》では県外への移動に制限がある中で、県内に住んでいる外国人をツアーのターゲットにするなどの工夫が見られた。なお、《神奈川県伊勢原市》では、旅行会社の立場から、一般的には訪日外国人の数および国籍は中国、インド、韓国が増えているデータがあるのに対して、大山で例年秋に開催している薪能の参加者はアメリカ、イギリス、オーストラリアの数が多い。したがってこうした日本遺産、地域芸能、伝統芸能を求めてくる外国人層は一般の訪日外国人とは異なることが指摘された。一方で《岩手県平泉町》では、ワークショップでWORLD TAIKO CONFERENCE実行委員会の協力により、外国人の視点も踏まえたフィードバックを行い、さらに地域芸能に関心の高い外国人へのPRのために、同実行委員会Instagramで英語によるタイアップ投稿を実施した。

以上より、それぞれの事業において、こうしたコロナ後を見据えた活動を「種まき」、すなわち今後見越されるインバウンドの回復に向けて遅れがないように、準備を整えるための活動としても位置付けていることが明らかになった。本事業により得られた客層の特色や外国人参加者たちからの声は大変貴重であることから、**これらを分析し、インバウンド回復後に需要に見合った事業展開を検討する必要性**もあわせて指摘できよう。

②マイクロツーリズムへの展開

コロナ禍におけるツアーで浮上した課題として、**「少人数化」「個人化」「近距離化」**が

挙げられる。《神奈川県伊勢原市》では、行政の側からの情報として、観光客がこれまでの団体客から家族や個人へと少人数化しているという行動変容が見られ、移動手段も公共交通から自家用車へシフトしていることが一定程度見られるとのことだった。ツアーを主催する側としてもコロナ禍でどこまでの人数を想定できるのかは大きな問題であるが、こうしたツアーでは、２．（３）で指摘したとおり、多くの参加者が感動を共有することも大切である。したがって、感染予防のために参加者が一同に動けない点はツアーの大きなハードルの一つとなっていると言う。こうした課題に対して、大人数での感動の共有にかわる仕掛けが必要であり、いま、観光業界全体として、これまでの手法からの転換を迫られていることが指摘できよう。一方で、移動制限があるコロナ禍においては、旅行の近距離化（近隣県からの移動）が進んでおり、実際に近隣1時間から2時間で行ける所に行って旅行をするなど、旅というよりは「生活圏が異なるところに行って違う空気を吸う」というような感覚での移動が増えていることも、複数の行政から指摘された。

こうしたコロナ禍の変化の中で重要な視点となってくるのが「マイクロツーリズム」である。第一に近場だからこそ目を向けてこなかったコトやモノに改めて目が向けられる、あるいは新たなことに挑戦できる点（例えば、地域芸能や伝統の食文化などの新たな文化資源と出会えるなど）、第二に「通う」ことができるので中長期的なプログラムをツアーに組み込める点（例えば、地域芸能の一度きりの体験ではなく、当該地域のコミュニティに入って神楽を継続的に教わる、回を重ねてスキルアップすることにより満足度を高められる）など、参加者が少人数であっても満足度の高いコンテンツや仕組みを準備できれば、本事業が次に目指すべき方向性としては有効な視点であると思われる。

③オンラインとリアルのハイブリッドの時代へ

本事業では、期せずして訪れたコロナ禍の影響で前年度のオンラインによるプログラム展開の検討を経て、今年度、映像制作とオンライン配信、リアルの公演とツアーの実施という二つのプログラム開発に挑戦し、様々な点で成果を得てきたことは、これまで述べたとおりである。前者の映像制作とオンライン配信のプログラム開発に関しては、例えば《岩手県平泉町》の「コロナ禍でオンラインでも情報発信していけること、空気感も画面をとおしてお伝えする術があることを初めて認識できた取り組みだった。」という行政からの評価にもあらわれているとおり、2021年度はさらなるオンラインへの可能性が確認できた年であったと言えるだろう。一方で社会一般的には、2021年度の後半からはオンラインとリアルを掛け合わせたハイブリッド型の可能性を模索している企業が増えており、本事業の今後の展開としても、今後は、本物に触れる機会を設けながら、例えば導入部分や後からの学びにオンラインや映像を使うなど、ハイブリッドの時代になっていくことが予想される。オンラインとリアル、それぞれの展開を検討してきた本事業だからこそハイブリッドの時代に対応し得る展開が可能であり、特にこの2年間でその両方を展開してきた《神奈川県伊勢原市》と《鹿児

島県薩摩川内市》は、それぞれの地域の中で2年間のプロセスを活かした事業展開が今後は期待できよう。

（3）学校教育との関わりについて

今回、「学校」というキーワードが出てきたのは、第一に《鹿児島県薩摩川内市》である。今年度の事業では、地元の小中学生4名が約3か月間、薩摩琵琶を稽古して公演に出演し、初めての稽古からリハーサル・本番に挑んだ様子を映像制作しYouTubeで公開している。行政によると、そのプロセスから子どもたちの吸収力のすごさに驚くとともに、公演を見に来ていた小中学校の教師が普段見られない子どもたちの姿を前に一番驚いていたという。多くの学校でアウトリーチとして地域芸能や伝統芸能の鑑賞と体験プログラムが組まれて久しいが、苦慮しているのがアウトリーチにつなげるための事前学習である。本事業では、子どもたちが今年度の体験プログラムの前に、昨年度制作された映像をとおして、地元に縁のある薩摩琵琶の存在をまず知り、そして地元の日本遺産を舞台に他の伝統芸能や地域芸能とコラボレーションをする様子を見ることができたことから、学校アウトリーチで考えると、昨年度制作の映像は事前学習にも位置付けることができるだろう。したがって、本事業の試みは学校教育現場においても生かせる可能性があると考えられる。

第二に《神奈川県伊勢原市》では、旅行会社の立場から、こどもたちの伝統文化の継承は重要であることから、ツアー等による学校や教育関連の団体向けのメニューの充実や教育の視点からの観光コンテンツの充実、子どもたちの披露の場の提供など、旅行会社として学校教育とも連携しながら、地域文化の継承に寄与することへの希望が語られた。地域芸能の伝承をめぐり、学校教育とツーリズムはこれまで結び付けて検討されてきたことはほとんどないため、これらは新たな視点であると言えるだろう。

（4）映像制作・オンライン分野の可能性について

《石川県小松市》では、映像制作の立場から、「これまで触れたことがなかった伝統芸能に映像という業界で関われたことが今後の映像制作やものづくりにも反映できる貴重な経験であった」こと、そして「伝統芸能とそうした接点が生まれたことが自分の中で資産となった」という声が聞かれた。ここで併せて指摘されたのが、**「映像やデジタル」と「伝統芸能や地域芸能」の親和性の高さ**である。すなわち、伝統芸能や地域芸能を映像等によりアーカイブ化しそれをコンテンツとして発信する、さらにはターゲットを分けてそれぞれに合ったコンテンツを作っていくなど、映像やデジタルをとおして**「残すこと」と「広げること」が、コロナ禍を経たこれからの時代の新しい価値となっていく可能性**を秘めているという。そうした観点からも、映像制作の業界から見て本事業はそのプロセスにも魅力があり、業界として世界を広げていくヒントを得たという評価が聞かれた。

これらの新たな展開の可能性は、例えば《岩手県平泉町》の伝承者の間から浮上した「も

う少し地元に対して発信をしたい」「教えている子供たちの親世代は神楽をやってきている人が多いので、その世代のモチベーションをあげたい」という要望にも対応し得る可能性があるものである。また、《神奈川県伊勢原市》で何度も聞かれたのが、「こどもたちの発表の場を用意することの大切さ」である。対面だからこその熱量の共有はすでに指摘したところであるが、それを願ってもかなわなかった状況を、我々はコロナ禍の2年間ですでに経験している。したがって、対面でのそうした発表の機会の創出と並行して、**こどもたちが「何かを成し遂げた」経験を感じられるコンテンツ、ひいては地域を守っていこうと思えるコンテンツの検討**も、映像制作との連携により可能となるだろう。

（福田 裕美／東京音楽大学准教授）